

点数主義

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

大学院入試

夏の終わり、大学院入試（略して院試）の季節である。私が受験したのは四〇年以上も前の話だが、同級生の中には今でも院試の夢を見るという者がいるくらい、緊張を強いられた。意表を突かれた問題のことも思い出す。例えば論述式の問題では、うる覚えではあるが次のような問題が出た。「中世以降の空間構成要素としての階段の歴史について論ぜよ」、或いは「開いた系と閉じた系について論ぜよ」、或いは「建築における縄張りについて論ぜよ」。当惑しながらもそれぞれに関連する知識をかき集めて間に合わせの

「論」を書きなぐった。冷や汗ものであった。その後出題する側に回ってみると、これらの問題は一体どのような採点したのかが気になるし、さぞかし大変だったろうと当時の先生方の労をねぎらいたい気持ちにもなる。

例えば、私のような職業の者の業

各賞から 業者の決定まで

務は相当程度採点作業で占められている。院試や他の試験の採点に限らない。大学内の試験関係以外の業務、或いは学外の建築界関係の業務のあちらこちらで採点作業が待ち受けている。

例えば、本稿を書いている八月だと、建築の色々な賞の審査業務の類が多い。当の日本建設業連合会にも伝統ある「BCS賞」というのがあるが、他の様々な団体も実際に建った建築を対象に顕彰活動を行っている。

この種の賞の審査の一般的なやり方は次のようなものである。広く応募を募り、所定の書式にプロジェクト概要や設計意図、各種図面等をまとめて提出してもらう。審査会を組織して、各審査員は多くの応募者の提出書類に目を通し、何作かの「推し」を選ぶ。先ずこの時点で審査員はそれぞれの方法で採点を行っている筈である。「推し」が集



1972年に官報公示された「工業化工法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」。22企業グループの提案は、広範な審査項目で採点された。1973年に入選1位となったASTMグループの提案に基づいて実現された住宅地の姿(2013年)

まったところで、議論によって候補作の数を絞る。その次には、絞られた候補作についてより詳しく中身を検討する。その手段として現地審査を行うケースも少なくない。現地では設計者だけではなく事業主や施工者も揃って審査会メンバーを出迎え、実際の建築空間を案内しながら詳細を説明することが多い。この後「私のような者が誠におこがましい限り」という心持ちで、ここまで残ったすべての候補作に評価の優劣を付けるべく、また採点をする。そしてその採点結果をまとめて、最後は話合いや投票によって受賞作を決定する。

実際の建設プロジェクトの設計者や施工者を決める際に行うコンペや、ある種の先導性を持った建設プロジェクトに補助金等をつける際の審査においても、似たような経緯を辿るものが多いが、それらの場合には、賞の場合よりも一層強く説明責任が意識されるため、採点基準がより細かく決められていることが多い。

思い返せば、研究助成の審査でも

同様の採点を行っているし、大学の人事においてもそういう方法を採用している事例が少なくない。今更ながら自らの採点業務の多さに驚くとともに、そのように自分もまた採点されているということに少々辟易とさせられる。

採点だらけの習慣は 変えられるか

何年前と明示できないので心も

となくはあるが、少し前までは、点数ばかりを気にするようになる「点数主義」は社会を駄目にするというような論調があったし、そういう論調がぼんやりとではあるが、広く賛意を集めていたように思う。あれはどうなったのだろうか。

ふと気付いてみれば私はこんな風に採点漬けの毎日だし、それで何かを成したような気になっていたりもする。別に私のような職業に限らず、読者の皆様も多かれ少なかれ

そうなのではないか。採点的な業務は減ることはなく、そのペースはともかく、このところ増える一方だったのではないか。無意識の内に、実はどつぷりと点数主義に染まってしまっているのではないか。

先述したいくつかの種類の採点業務を、果たして変えられるだろうかという観点から見直してみると、採点という方法を避けることがそう容易ではないことがわかってくる。採点という方法を用いること、そして採点の基準等は、それを一旦白紙に戻すとすれば革新的な代替案を必要とし、それが成立するには合意形成に多大なエネルギーがかかることが容易に想像できる。

私としては、採点する側に回った際の「私のような者が誠におこがましい限り」という心持ちだけでもどうにかしたいのだが、そのために先ずは現状で公表していない採点基準等を、応募者にも事前にわかるように示す方法があり得るとは考えている。さて、いかがなものだろうか。